

## 徒然なるままに

薬学部 辻 彰

### ワードプロセッサ

手回し計算機を用いていた昭和37年頃に我が教室で購入した、掛け算と割り算それに5つほどのメモリー機能を有するリレー計算機は、机ほどの大きなもので、計算スピードも遅い代物であったが当時では便利なものであった。本格的にコンピュータを使い始めたのは、昭和39年頃に理学部の計算機室にNEAC2230計算機が導入されてからである。当初はFORTRANに類似したNEAC語という言語教育を受け、テープ入力による自らのプログラムに忠実にコンピュータが作動した時は何とも言えない快感を味わったものである。

その頃はコンピュータは数値計算しかできないものと思い込んでいたが、それが今では、文書処理、情報検索などの機能があることを知らないで軽べつの目で見られる時代になった。タイプライターで英文論文を打ち、打ち上がった原稿を読み直し、推敲を重ねてまた打ち直す。もう一度読むとまた修正がしたくなる。適当なところで妥協して、投稿する。返送されて来た論文を審査意見に従って訂正加筆してタイプし直す。リジェクトされた時はもっと悲惨である。別の雑誌に投稿するとなるとスタイルが異なるので、全部打ち直しということになる。かなりの時間がタイプ打ちにとられる。これが、ワードプロセッサを利用してなかった頃のパターンである。ところが、マイコンの英文ワードプロセッサを使い始めてから、随分と能率が上がり、存分に推敲でき、上記のこれまでの苦労は全て解消した。マイコンを利用した日本語文章の作成は、使用するソフトの機能によっては入力する手間は大変な作業で、途中で投だしたくなる時もあったが、最近手に入れたローマ字仮名変換による文節変換機能を持ったソフトは専用機器に劣らぬ機能を持っているので、文書作成も早くなり苦痛でなくなった。プリント出力した原稿は読みやすく文章の推敲に便利で、清書の時間が省け、しかもゲラ刷りの誤植も極めて少なくなった。この原稿も、ブラウン管にむかって思いつくままに書込んでいる。マイコンを初めて使用した初期の頃は、せっかくの文書をついうっかり消去したり、文書デスクが読めなくなったり、随分と無駄な時間を取ったが、慣れた今ではトラブルもなく、ワードプロセッサは我が教室では引っ張りだこの状態である。

ある時、日本語ワードプロセッサで入力している私を眺めていた外国からの留学生が、ひら仮名が次々と漢字に変換されていく様に感激し、次には自分で操作してしきりと感心した後に、「カンジカラヒラガナニヘンカンデキマセンカ？」と尋ねた。なるほど難解な漢字に悩まされている彼らにとって深刻な問題である。残念ながらそのようなソフトはない。

## ファミコン

長女の高校入試も終り、お預けをくらっていた中2の次女、小4の三女に、念願のファミコンが与えられた。それもデスクシステムである。6年ほど前にカセットテープ付きマイコンにデスクを取り付けた時には、そのアクセスの速さ、記憶容量の大きさに、随分と驚いたものである。にもかかわらず、娘たちは別に驚くわけでもなく、感心する様子もなく、一寸説明しただけで、そのデスクシステムをいとも簡単に使いこなしている。ゲームも面白そうだからと、やってみたが、右手と左手の指が思うように動かず、娘たちから軽べつの目でみられる始末。早々に自分の部屋に退散してワードプロセッサで論文作成をしていると、コーヒーを運んで来た妻は自分にも使い方を教えて欲しいと言う。そこで、システムデスクの立上げから説明したが、どうも良く分かっていないなと横目でたどたどしくキー操作をしている妻を見る。娘たちより飲み込みが悪い。私のいない時に使おうとしてもどうしてよいか分からなくなってスイッチを切ってしまうらしい。妻の前で得意になっている私も、TSSの途中で何やら良く分からないコマンドに立ち往生することもしばしばでセンターに問い合わせても専門用語がよく分からない有り様で、実は同じ穴のムジナなのかも知れない。頭が堅くなっている中年は現代の進歩についていくのがやっとなのである。

## 日本人と牛乳

1リットルほどの牛乳をおいしそうに飲んでいる外人を見ると驚いてしまう。私は、コップ一杯ですぐに下痢をする。三女もそうである。数年前アメリカに出張した折、牛乳にコーンフレークを入れた朝食が出て、ためらったが思いきって挑戦したら以外と美味であった。それ以来、朝食にこのメニューを続けたら、いつの間にか、1本の牛乳も平気で飲めるようになった。恐らくラクターゼの酵素誘導のおかげだろうと思っていた。ある時、著名な生理学の教授と酒の席でその話をしたところ、その教授は次の理由から酵素誘導説を否定された。

つまり、日本人が消化することのできる牛乳量は平均200ミリリットル程度であり、遺伝的にはその消化量も次第に増加の傾向にあるが、個体内ではラクターゼの酵素誘導はない。哺乳動物は母乳で子供を育てる。しかし成長した子供が、母乳によらず、自らの力で餌を求め、しかも外敵から母子を守るためには、合理的な何等かの手段で子供を乳房から離さねばならない。それは、適当な年齢になったら、ラクターゼ活性を低下させることによって達成される。種の保存にとって合理的な生理機能の変動である。農耕民族として生活して来た日本人とアフリカのなんとかという種族だけが、哺乳動物と同じメカニズムで、成人になると牛乳がそう多くは飲めなくなるそうである。牧畜民族である欧米人には、1から2リットルの牛乳が消化できるラクターゼ活性があり、それは成人になっても低下しない。

ではなぜ、私は牛乳が飲めるようになったのか。かの教授は、実験的実証はないのだがと前置きさ

れ、グルコースやアミノ酸を栄養源とする腸内細菌が、ラクターゼ活性を持ちそれが繁殖したためではないかと推論する。納得できる説である。腸内細菌との共棲は必要であるが、なにも大量に養う必要はない。単純な私は、それ以来、牛乳を断った。ある日曜日にタモリのテレビ番組を見ていたら、20才台の若者が牛乳の早飲競争をやっていた。10本以上の牛乳をやや苦しそうであったがとにかく飲んでしまった。ひょっとしたら、最近の若い日本人は欧米なみの牧畜民族的生理活性人間に変貌しているのかもしれない。